漱石略年表

1867 年（慶応 3 年）

1 月 5 日 - 江戸牛込馬場下横町（現・東京都新宿区喜久井町）に父・夏目小兵衛直克、母・千枝の五男として生まれる。夏目家は代々名主であったが、当時家運が衰えていたため、生後間もなく四谷の古道具屋（一説に源平村の八百屋）に里子に出されたものの、すぐに連れ戻される。

1868 年（明治元年）

11 月 – 内藤新宿北町裏の門前名主・塩原昌之助・やす夫妻の養子となり、塩原姓を名乗る。

1869 年（明治 2 年）

- 養父・昌之助、浅草の添年寄となり浅草三間町へ移転。

1870 年（明治 3 年）

- 種痘がもとで疱瘡を病み、顔に瘢痕（あばた）が残る。「一つ夏目の鬼瓦」という数え歌に作られるほど、痘痕は目立った。

1874 年（明治 6 年）

- 養父・昌之助、旧幕臣の寡婦日根野かつと通じ、養母・やすが不和になり、一時喜久井町の生家に引き取られた。その後、養父に引き取られ、かつとその娘れんと生活。浅草寿町戸田学校下等小学第八級（のち台東区立精華小学校。現・台東区立蔵前小学校）に入学。

1876 年（明治 9 年）

- 養母が塩原家を離縁され、塩原家在籍のまま養母とともに生家に移った。市ケ谷柳町市ケ谷学校（現・新宿区立愛日小学校）に転校。

11、12 歳頃の金之助

1878 年（明治 11 年）

- 2 月 - 回覧雑誌に『正成論』を書く。
- 10 月 - 錦華小学校（現・千代田区立お茶の水小学校）・小学尋常科二級後期卒業。

1879 年（明治 12 年）

- 東京府第一中学校正則科（東京都立日比谷高等学校の前身）第七級に入学。

1881 年（明治 14 年）

- 1 月 - 実母・千枝死去。府立一中を中退。私立二松學舎（現・二松學舎大学）に転校（翌年中退？）。

1883 年（明治 16 年）

- 9 月 - 神田駿河台の成立学舎に入学。

大学予備門時代の金之助（1886 年）

1884 年（明治 17 年）

- 小石川極楽水の新福寺二階に橋本左五郎と下宿。自炊生活をしながら成立学舎に通学。

  - 9 月 - 大学予備門（明治 19 年（1886 年）に第一高等中学校（後の第一高等学校）に名称変更）予科入学。同級に中村是公、芳賀矢一、正木直彦、橋本左五郎などがいた。

1885 年（明治 18 年）

- 中村是公、橋本左五郎ら約 10 人と猿楽町の末富屋に下宿。

1886 年（明治 19 年）

・7 月 - 腹膜炎のため落第。この落第が転機となり、のち卒業まで首席を通す。柴野（中村）是公と本所江東義塾の教師となり、塾の寄宿舎に転居。

1887 年（明治 20 年）

- 3 月に長兄・大助、6 月に次兄・栄之助がともに肺病のため死去。急性トラホームを患い、自宅に帰る。夏に初めての富士登山。

1888 年（明治 21 年）

  - 1 月 - 塩原家より復籍し、夏目姓に戻る。
  - 7 月 - 第一高等中学校予科を卒業。
  - 9 月 - 英文学専攻を決意し本科一部に進学。

1889 年（明治 22 年）

  - 1 月 - 正岡子規との親交が始まる。
  - 5 月 - 子規の『七草集』の批評を書き、初めて“漱石”の筆名を用いる。
  - ８月・仲間５人と房総紀行。漢詩文「木屑録」を記し、子規に送る。

1890 年（明治 23 年）

  - 7 月 - 第一高等中学校本科を卒業。
  - 9 月 - 帝国大学（のちの東京帝国大学）文科大学英文科入学。文部省の貸費生となる。月額 85 円を支給される

1891 年の金之助。富士登山の記念に撮影

帝国大学時代の漱石（1892 年 6 月）

1891 年（明治 24 年）

  - 7 月 - 特待生となる。二度目の富士登山。
  - 12 月 - 『方丈記』を英訳する。

1892 年（明治 25 年）

  - 4 月 - 分家。北海道後志国岩内郡吹上町に転籍する（徴兵を免れるためと

の説がある)。

- 5 月 - 東京専門学校（現在の早稲田大学）講師となる。

1893 年（明治 26 年）

- 7 月 – 東京帝国大学文化大学を卒業、大学院に進学。
- 10 月 - 高等師範学校（のちの東京高等師範学校）の英語教師となる。高等師範の校長は講道館創設者として有名な嘉納治五郎という柔道の大家だった。

1894 年（明治 27 年）

- 2 月 - 結核の徴候があり、療養に努める。
- 精神に変調をきたし、１２月鎌倉円覚寺で釈宗演に参禅

漱石の松山時代における寓居「愚陀仏庵」

第五高等学校教授時代の漱石

1895 年（明治 28 年）

- 4 月 - 松山中学（愛媛県尋常中学校）（愛媛県立松山東高等学校の前身）に菅虎雄の口添えで赴任。（月俸 80 円）
- 12 月 – 上京し貴族院書記官長・中根重一の長女・鏡子と見合いをし、婚約成立。

1896 年（明治 29 年）

- 4 月 – 愛媛県中学を辞して熊本県の第五高等学校講師となる。（月俸 100 円）
- 6 月 - 中根鏡子と結婚。
- 7 月 - 教授となる。

1897 年（明治 30 年）

6 月 - 実父・直克死去。

１2 月～翌年 1 月同僚山川信次郎と小天温泉の前田案山子宅に滞在し、前田の長女卓（つな）子を識る。

1898 年（明治 31 年）

6 または 7 月妻鏡子白河出川淵で投身自殺未遂。

10 月 - 俳句結社「紫溟吟社」の主宰になる。

1899 年（明治 32 年）

5 月 - 長女・筆子誕生。

9 月　山川信次郎と阿蘇旅行。

ロンドン留学

1900 年（明治 33 年）

5 月 – 文部省より現職のままでのイギリスに留学（年学費 1800 円）を命ざれ、9 月出航し、(途上でパリ万国博覧会を訪問)。

10 月ロンドンに到着。ロンドン大学の講義は 1 カ月でやめ、クレイグ教授の個人授業を受け始める。

1901 年（明治 34 年）

1 月 - 次女・恒子誕生。

5 月から約 2 か月間、同宿した池田菊苗から刺激を受ける

1902 年（明治 35 年）

精神に変調をきたし、同宿した土井晩翠らを驚かす

9 月 - 正岡子規没。

10 月スコットランドのディクソン邸に滞在し、

12 月　帰国の途に就く

第一高等学校本館玄関前の漱石（1907 年 2 月）

1903 年（明治 36 年）

1 月　帰国し

- 4 月 - 第一高等学校講師（年俸 700 円）になり、東京帝国大学文科大学講師（年俸 800 円）を兼任。
- 7～9 月妊娠中の妻と 2 か月間別居
- 10 月 - 三女・栄子誕生。水彩画を始め、書もよくした。

1904 年（明治 37 年）4 月 - 明治大学講師を兼任（月俸 30 円))。12 月、「吾輩は猫である」執筆

1905 年（明治 38 年）1 月 - 『吾輩は猫である』を『ホトトギス』に発表（翌年 8 月まで断続連載)。各誌に短編小説を発表し、門下生の訪問も繁しくなる。

- 12 月 - 四女・愛子誕生。

1906 年（明治 39 年）4 月 - 『坊っちゃん』を『ホトトギス』に発表。

9 月　「草枕」を発表

岳父中根重一死去。

10 月面会日を木曜日に限定する。

1907 年（明治 40 年）

- 1 月 - 『野分』を『ホトトギス』に発表。

朝日新聞社に入社（月俸 200 円)。職業作家としての道

- 4 月 - 一切の教職を辞し、朝日新聞社に入社（月俸 200 円)。職業作家としての道を歩み始める。
- 5 月　「文学論」刊行・

- 6 月 ‐ 長男・純一誕生。『虞美人草』を『朝日新聞』に連載（ ‐10 月）。

1908 年（明治 41 年）

- 1 月『坑夫』（ ‐4 月）、
- 3 月　平塚明（らいてう）と心中未遂事件を起こした森田草平を保護し、事件の小説化を勧める。
- 6 月『文鳥』、7 月『夢十夜』（ ‐8 月）、9 月『三四郎』（ ‐12 月）を『朝日新聞』に連載。
- 12 月 ‐ 次男・伸六誕生。

1909 年（明治 42 年）3 月 ‐ 養父塩原昌之助から金を無心され、そのような事件が 11 月まで続いた。

6 月～10 月「それから」連載

9 月　満鉄総裁中村是公の招きで満韓各地を旅行し、

10 月～12 月「満韓ところどころ」を連載

11 月、「朝日文芸欄」を新設、主宰。

1910 年（明治 43 年）

- 3 月 ‐ 五女・雛子誕生。
- 同月開始の「門」の連載を 6 月に終え、
- 6 月 ‐ 胃潰瘍のため内幸町の長与胃腸病院に入院。
- 8 月 ‐ 療養のため修善寺温泉に転地。同月 24 日夜、大吐血があり、一時危篤状態に陥る。（修善寺の大患）
- 10 月 ‐ 長与病院に入院。「思い出す事」執筆

1911 年（明治 44 年）

2 月　退院

- 2 月 21 日 ‐ 文部省からの文学博士号授与を辞退。紛糾。
- 8 月 ‐ 朝日新聞社主催の講演会のために明石「道楽と職業」、和歌山「現代日本の開化」、堺「趣味と形式」、大阪「文芸と道徳」に行き、
  大阪で胃潰瘍が再発し、湯川胃腸病院に入院。
- 10 月　「朝日文芸欄」廃止
- 11 月 29 日 ‐ 五女・雛子、原因不明の突然死。のちの漱石の遺体解剖の遠因となる。

1912 年（明治 45 年/大正元年）45 歳

1 月～4 月「彼岸過迄」連載

9 月　痔の再手術のため入院

12 月　「行人」連載開始

1913 年（大正 2 年）46 歳

- 1 月 ‐ ひどいノイローゼが再発。

- 3 月 - 胃潰瘍再発。
- ４月　「行人」の連載を中断。　9 月再着手 11 月完結
- 5 月下旬まで自宅で病臥した。北海道から東京に再転籍する。

「漱石山房」書斎の漱石（1914 年）

1914 年（大正 3 年）47 歳

- 4 月 - 『こゝろ』を『朝日新聞』に連載（ - 8 月）。
- 11 月 - 「私の個人主義」を学習院輔仁会で講演。

1915 年（大正 4 年）48 歳

１月～2 月　「硝子戸の中」連載

- 6 月 - 『道草』を『朝日新聞』に連載（ - 9 月）。
- 11 月 - 中村是公と湯ヶ原に遊ぶ。
- 12 月 - 芥川龍之介、久米正雄が門下に加わった。このころからリウマチに悩む。

1916 年（大正 5 年）49 歳

- 1 月 – 随想「点頭録」9 回で中断、リウマチの治療のため、湯ヶ原天野屋の中村是公のもとに転地。
- 5 月 - 『明暗』を『朝日新聞』に連載（ - 12 月）。
- 11 月　胃潰瘍の発作で病床に着く
- 12 月 9 日 – 連載中絶のまま、午後 7 時前、胃潰瘍により死去。戒名・文献院古道漱石居士。